

「岸边のふたり」のために

大きな自転車

小さな自転車

車輪が廻る

車輪が廻る

二つ並んで並木道を走る

二人並んで並木道を漕ぐ

岸に出た父は

娘を抱きしめてから

独り静かにボートを漕ぎ出す

父はそのまま帰らない

風が吹き光りが変わり

葦がそよぎ

並木道の影が移り

置き捨てられた自転車も消え

幾度も行き交う人たちが変わり

時が移り少女は老婆へと変わった

その間

友人と賑やかに通ったこともある

一人だけ分からないように川岸を見た

静かな川面だけが見えた

結婚し夫や子供をいざなつて河を訪れた

皆は公園で遊んでいるようにはしゃいでいた
一人だけ岸辺から

誰もいない河を眺めた

風が吹き光が移った

老婆になっても

自転車をよたよた漕いで岸に通った

父を思い父を想った

自分の世界に波風立てることもなく

ただ一人父を想った

ある日意を決して岸の芦原に降り立った
葦を吹く風の向こうに

半ば砂に埋もれてボートが一艘見えた

「父さんのものだ。やっぱり…」

再会を祈りのように願っていた少女の人生は

今砂のように崩れた

埋もれたボートの中で

目を覚ました老婆は

人の気配を感じて立ち上がる

輝く水面の反射光の中に

男が立っていた

父だ

やっぱり信じていた通りだった

父は居た父が居たそこに父が立っていた

老婆は必死に父に駆け寄った

光りが彼女に戯れ優しくからんで

彼女の姿を変えていった

老女の萎えた足は若い線を描き

足取りは仔鹿のように軽く

限りなく少女へと変身した

父がしつかりと抱きとめたものは

彼が捨てた時よりやや成長した

娘の柔らかかで温かい体だった

光りと風が吹き抜けていった

(「岸边のふたり」のために)(2003.7.8)